

平成30年6月12日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284105

研究課題名(和文) 儒教的民本主義と国民国家建設 東アジアの政治文化史的比較

研究課題名(英文) Confucian Democracy and the Nation-state Construction: Comparison of Political culture in East Asia

研究代表者

趙景達(Cho, Kyeungdal)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：70188499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：東アジア四国の近世社会では、儒教的民本主義が共有されていた。しかし日本の場合、それは国家の原理ではなく、国家統治の手段として機能した側面が強かった。そのため、平等思想は朱子学や陽明学の体内から形成されず、西欧思想の受容によって外来的に形成され、富国強兵思想も尋常でないほどに発展した。このことは勢い、民衆運動のあり方にも影響を及ぼし、日本では士人が民衆運動の指導者になることはほとんどなかったが、他の三国では士人が民衆の先頭に立つことは珍しいことではなかった。

研究成果の概要(英文)：Confucian Democracy was shared in the early modern society of East Asian four countries. However, in the case of Japan, it was not the principle of the state whatsoever. That aspect, that functioned as a means of national governance, was really strong. Therefore, the idea of equality was not formed from the body of Neo-Confucianism or the doctrines of Wang Yang-Ming, being created extrinsically by accepting Western ideas. Additionally, the idea of fortifying the country and strengthening the military was truly developed. This influenced popular movements. In Japan, then, Shijin(士人, the Confucian intellectuals) rarely became a leader of the popular movements. Contrarily, in the other three countries, it was not unusual that Shijin led similar movements.

研究分野：朝鮮史 日朝比較史

キーワード：儒教的民本主義 朱子学 比較史 自強と富国強兵 近代国家 名望家 民衆運動 宗教

### 1. 研究開始当初の背景

比較史の意味は、共通性の認識の上に差違性を発見することにあるが、深谷克己と宮嶋博史は東アジアの共通性を認識することの重要性について、先駆的に指摘した。すなわち、深谷は、仁政イデオロギーを前提とした公儀との恩頼関係 = 「百姓成立」の論理を先駆的に発見し、やがてそれを東アジアの「儒教核」政治文化としての共通性の問題にまで議論を展開させるに至った(『「百姓一揆の思想」』思想』584, 1973, 『「百姓成立」』塙書房, 1993, 『東アジア法文明と教諭支配』『アジア地域文化学の発展』雄山閣, 2006)。また宮嶋は、東アジアの近世社会は世界史的に見て均質な小農社会であったことに特徴があるとした(『東アジア小農社会の形成』『アジアから考える』6, 東京大学出版会, 1994, 『両班』中央公論社, 1995)。以上のことを踏まえていけば、近世以降、東アジアは、小農社会を前提にした儒教的民本主義を標榜した地域であったということができる。

しかし、そこには当然に時間差があった。中国では、宋代以降、一君万民思想が培われ、皇帝は仁政イデオロギーを体現する者として専制権力を振るうようになった。朝鮮では、1392年に成立した朝鮮王朝以降、儒教化が進展し、18世紀の英祖、正祖の時期に一君万民思想が培われた。日本ではそれにやや遅れて、近世以降、儒教化が進展したが、一君万民思想は、ようやく明治期に入って培われた。また、同じく儒教的民本主義ではあっても、それをいかに体現していくかについて、温度差があった。中国では、強大な郷紳層や商人層の存在のもと、格差社会が進展し、民本主義はさほど意識されることはなかった。それに対して朝鮮の場合は、抑末政策をとったばかりか、朱子学の忠実な実践が理想化されたがゆえに、民本主義は国初より自覚的に標榜された。そこでは、儒教は国家の原理となり、「文治」が至上化された。

一方、日本の場合は、儒教化が進展したとはいえ、「武威」は依然として幕藩体制の最大のよりどころであった。民本主義によって立つ牧民意識がありはしたが、厳格な法治思想と「御救」による仁政主義は両立していた(小川和也『牧民の思想』平凡社, 2008)。そこでは、儒教は、国家の原理ではなく、国家統治の手段という性格が強かった。

深谷克己は、東アジアを一つの「法文明圏」として説明し、確かに比較史の視座を切り開いたが、しかし、共通性を強調する結果、かえって3国の差異性に対する認識が弱まっているように思われる。「文治」主義を絶対化した中国・朝鮮、なかんずく朝鮮から見た場合、近世日本の儒教化は決して幕藩体制の原理となることはなかった。それゆえに、幕末段階において、「国体」思想が誕生することになるのであり、それは近代日本の原理にさえた。

以上のように東アジアの近世は、儒教的民

本主義という共通のイデオロギーがあったにもかかわらず、その展開の仕方は一様ではない。しかし、その本格的な比較はいまだ十分になされていない状況にある。

### 2. 研究の目的

従来、比較史研究といえば、日本と西欧とを比較することが当たり前に行われてきた。しかし、アジアが台頭している現段階において、それはあまりに脱亜的な問題意識であり、一面的だというそりを免れがなくなっている。比較史には、共通項を前提に問題を組み立てていくことが求められるが、本研究では、以上に述べたような研究史の現状を踏まえ、儒教的民本主義がいかに東アジアにおいて展開されたのかを、比較史的に分析した。

しかし、かつて東アジア NIES の台頭を前提に、儒教資本主義的な発想で比較史が試みられたことがあるが、本研究はそうした近代化論的な発想はとらなかつた。むしろ、近世社会において儒教的民本主義を共有しながらも、その政治文化は一様ではなかったことに着目し、西欧的な近代国民国家とは異なる国家建設が、ベトナムを含めた東アジア四国において各々別様にいかに進められようとしたかを明らかにしようとした。

そこで、本研究では、政治文化なるものが長期的な文脈のうちに生成され、それは容易には断絶することがないという視点を大事にした。近代国家形成をなす上においても、儒教的民本主義は何らかの形で生き続けたのであり、国民創生の過程を規定する重要な要因となっている。そしてまた、近代の政治文化も、儒教的民本主義を前提に形成されていくのであり、それは単に西欧の論理を輸入したものでは決してあり得ない。

本研究は、このような問題意識から、大きく二つの事項を明らかにすることを目的とした。一つは、近世社会における儒教的民本主義の様態の比較である。そしてもう一つが、近代国民国家形成がいかに儒教的民本主義を取り込みつつなされていくかという比較である。

### 3. 研究の方法

政治文化は3層からなっているというのが、本研究の基本認識である。すなわち、第1層 原理(政治理念・政治思想など)、第2層 現実(収税慣習・官民関係・選挙慣行・運動作法・地域関係慣習など)、第3層 表象(国旗・国歌・シンボル・儀礼・言葉など)であるが、本研究ではとりわけ第1層と第2層に着目した。原理は同一であっても、その現実には社会構造のあり方によって違ってくるのは当然である。たとえば、民主主義を信奉する国であっても、その思想内容やあり方には違いがある。到底民主主義とはいえないような国が民主主義を声高に叫ぶような現実もある。

こうした点に留意するならば、東アジア 4 国の民本主義思想は、同じく儒教を基礎に持ちながらも、微妙に違ってくるのは当然であり、その原形と近代的転回の様相が明らかにされなければならない。政治文化の現実も、近世社会から近代にかけて、その原形を維持しつつどのように変容したのかが問われる必要がある。比較の座標軸は、あくまでも東アジア 4 国の固有の文脈と論理に求められる。西欧的な文脈と論理をもって、比較分析をしないということである。従って、政治と道徳の分離に「作為の道」を見出し、そこに日本における近代的思惟の誕生を見ようとした丸山真男や、共同体の解体と個の自立を近代の指標にしようとした大塚久雄などの方法は、当然に排される。

そして、そうした政治文化的比較は、具体的には、「宗教と思想」、「身分と由緒」、「民衆と反乱」の 3 点から行っていく。近代移行期、4 国にはさまざまな宗教が誕生するが、そこにも何らかの儒教的民本主義の影が認められるかもしれない。また身分制の解消は、逆に由緒への執着をもたらしたが、それは国民意識の醸成にも何らかの関係している可能性がある。さらに、近代移行期には、4 国いずれにおいても民衆運動が活性化するが、それは国民国家形成といかに関係するのかが解明されなければならない。

#### 4. 研究成果

儒教的政治文化と儒教的政治思想に二分できる成果が達成され、東アジア 4 国においては、儒教的民本主義についての一応の最大公約数的認識が共有されていることが確認された。そのことは、東アジアの朱子学化と大いに関わるが、中国を嚆矢として朝鮮とベトナムがそれに次ぎ、日本は大分遅れて 18 世紀末頃に本格化した。

しかし同時に、日本の場合は生活の隅々まで儒教文化が浸潤しているわけではなく、平等思想の形成のされ方も、少なくとも朝鮮や中国とは違ったものであることが明らかにされた。すなわち、日本の場合は朱子学や陽明学の体内から平等思想を形成したというより、西欧思想の受容によって平等思想が外来的に形成されたということである。また、朝鮮などでは富国強兵思想は儒教的民本主義に反するがゆえに容易に形成されなかったが、日本ではその思想発展は尋常ではないほどに発展した。これは儒教的民本主義の受容が日本では原理主義的になされなかったことを示している。すなわち、日本では儒教は国家の原理ではなく国家統治の手段として機能した側面が強かったということである。このことは勢い、民衆運動のあり方にも影響を及ぼしたが、日本では士人が民衆運動の指導者になることはほとんど考えられないことであったが、他の三国では士人が民衆の先頭に立つことは珍しいことではなかった。

以上のような研究成果は、最終的に趙景達編『儒教的政治思想・文化と東アジアの近代』（有志舎、2018 年 3 月）としてまとめられ、刊行された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

##### 〔雑誌論文〕(計 7 件)

趙景達「安丸史学の検証 逸脱と道徳をめぐって」『現代思想』2016 年 9 月臨時増刊号, pp. 276 ~ 291, 査読無

村田雄二郎「超越富国強兵之夢 近現代東亞的四个“戦後”」『開放時代』第 6 期, 2016 年, pp.13 ~ 25, 査読無

趙景達「東学 = 天道教正史の変遷 教門の正統性と民族運動の主導権」『歴史学研究』938 号, pp. 16 ~ 26, 60, 2015 年

Murata Yujiro(村田雄二郎) “The Late Qing ‘national language’ issue and monolingual systems: Focusing on political diplomacy”, Volume 49, pp.108-125, 2016

村田雄二郎「近現代東亞的四个“戦後”」『南国学術』第 5 卷第 3 期, pp.11 ~ 15, 2015 年

愼蒼宇「逆立ちし宙吊りになる正義 「下から」の視点で捉える朝鮮近代史」『アジア民衆史研究』第 19 集, pp. 36 ~ 48, 2014 年

趙景達「儒教的民本主義と近代日朝関係・比較史」『アジア民衆史研究』第 19 集, pp.58 ~ 69, 2014 年

##### 〔学会発表〕(計 7 件)

武内房司「清末民衆宗教に見る宗教的同心の諸相：安丸良夫氏の民衆宗教研究に寄せて」アジア民衆史研究会 2017 年度第 2 回大会 2017 年

小川和也「日本における「牧民之書」の変遷」韓日歴史共同学術大会(国際学会) 2017 年

趙景達「甲午農民戦争 世界史的位相」珍島東学農民革命国際学術会議(国際学会) 2017 年

伊藤俊介「近代朝鮮における都市衛生事業の展開と民衆 漢城府の事例をもとに」アジア民衆史研究会・本科研共催「儒教的民本主義と国民国家形成」2015 年

小川和也「仁政思想と東アジア世界における日本」アジア民衆史研究会大会, 2015 年

小川 和也「日本における牧民書の受容と展開」茶山学術文化財団主催「東アジア牧民学の伝統と牧民心書」(国際学会) 2015年

武内 房司「天地会与近代越南南部社会」中国人民大学清史研究所等主催「“民間文献与華人社会”秦宝琦教授八秩栄慶国際学術研討会」(国際学会) 2015年

〔図書〕(計7件)

須田 努『吉田松陰の時代』岩波書店, 総216頁, 2017年

須田 努『三遊亭円朝と民衆世界』有志舎, 総271頁, 2017年

趙 景達・須田 努・村田 雄二郎(編)『  
?』, pp.57~79,  
pp.200~220, pp.370~395, 2017年

須田 努・白井哲編『地域の記録と記憶を問い直す』八木書店, 2016年, 総416頁

久留島 浩編『描かれた行列: 武士・異国・祭礼』東京大学出版会, 総392頁, 2016年

須田 努『三遊亭円朝と江戸落語』吉川弘文館, 総159頁, 2015年

小川 和也『儒学殺人事件 堀田正俊と徳川綱吉』講談社, 総386頁, 2014年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

趙 景達 (CHO KYEUNG DAL)  
千葉大学・大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号: 70188499

(2) 研究分担者

久留島 浩 (KURUSHIMA HIROSHI)  
国立歴史民俗博物館・教授  
研究者番号: 30161772

須田 努 (SUDA TSUTOMU)  
明治大学・情報コミュニケーション学部・教授  
研究者番号: 70468841

慎 蒼宇 (SHIN CHANGU)  
法政大学・社会学部・准教授  
研究者番号: 80468222

村田 雄二郎 (MURATA YUJIRO)  
東京大学大学院・総合文化研究科・教授  
研究者番号: 70190923

武内 房司 (TAKEUTI HUSAJI)  
学習院大学・文学部・教授  
研究者番号: 30179618

山田 賢 (YAMADA MASARU)  
千葉大学・大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号: 90230482

小川 和也 (OGAWA KAZUNARI)  
中京大学・文学部・教授  
研究者番号: 90509035

伊藤 俊介 (ITO SHUNSUKE)  
福島大学・経済経営学類・准教授  
研究者番号: 10737878

(3) 連携研究者

( )

研究者番号:

(4) 研究協力者

( )